

万葉集作者未詳歌卷の分類配列

——卷七・卷十の詠物歌寄物歌を中心として——

森 淳 司

一、作者判明歌卷と未詳歌卷の分類

万葉集諸巻のうち、巻一から巻六までの六巻は作者判明歌を分類配列した巻で、分類にあたっては周知のように、雑歌、相聞（又は譬喻歌）挽歌の万葉集の基本的な三大分類をとって、またその部類内の歌の配列は作歌事情を勘案しつつ、年次順に配列することを原則として^(注1)いる。ちなみに記せば次のようである。

巻一、雑歌(84) 巻二、相聞(56) 挽歌(94)
巻三、雑歌(155) 譬喻歌(25) 挽歌(69) 巻四、
相聞(309) 巻五、雑歌(114) 巻六、雑歌(161)

(算用数字は歌数を示す以下同様)

ところがこれらの六つの巻に対して、巻八と巻九を除く巻七より巻十四までの六巻は、作歌事情もほとんど喪失していたか、もしくは棄てられたと思われるいわゆる

作者未詳歌を収め、それらの歌の分類配列にあたっては前の六巻にはみられない別の工夫と配慮とがなされたと思われる。いま後者の作者未詳歌巻の分類を前例にならべて歌数を付して示すと次のごとくである。

巻七 雑歌(228) 譬喻歌(108) 挽歌(14)
巻十 春雑歌(78) 春相聞(47) 夏雑歌(42) 夏相聞(17) 秋雑歌(243) 秋相聞(73) 冬雑歌(21) 冬相聞(18)
巻十一 旋頭歌(17) 人麻呂歌集・古歌集出 正述心緒(47) 寄物陳思(93) 問答(9) 以上人麻呂歌集出 正述心緒(102) 寄物陳思(189) 問答(20) 譬喻(13)
巻十二 正述心緒(10) 寄物陳思(13) 以上人麻呂歌集出 正述心緒(100) 寄物陳思(137) 問答(26) 羈旅発思(53) 悲別歌(31) 問答歌(10)

卷十三 雑歌(27) 相聞(57) 問答(18) 譬喻歌(1)

挽歌(24)

卷十四 東歌(雑歌)(5) 相聞(76) 譬喻歌(9)

以上勸国歌 雑歌(17) 相聞(117) 譬喻歌(5)
挽歌(1) 以上未勸国歌

これらを通観してみると、その分類の項目においては卷七は卷三と同一であるが、他の未詳巻はその所収歌の内容にもよることであろうが、前六巻に比して、それにはみられなかった分類項目があらわれ、巻によりきわめてまちまちな類別がなされていて一貫しないうらみがある。たとえば、卷十一には歌体による分類としての旋頭歌が最初におかれたり、卷十二には他にはみられない羈旅発思、悲別歌の分類がなされたり、かつ問答と問答歌が同一巻中にみられたりする。また卷十三の譬喻歌や卷十四の挽歌の部などはわずか一首で一つの部類を与えられたり、卷十四は「東歌」の五首を先立って編まれたりして、前の六巻に比すれば、かりにも整序された姿をもつとはいえないようである。しかし、また一面、これら六巻は前六巻の三大分類の基本を踏襲する。卷七は卷三に等しく、卷十は四季による雑歌と相聞、卷十一、十二の両巻は目録に「古今相聞往来之歌類之上・下」とあるように相聞で、卷十三、十四も雑歌、相聞、挽歌の三部

をもち、問答、譬喻歌が相聞より分けられたかと思われるに過ぎないし、卷十二の相聞往来歌中の後半の羈旅発思以下は旅の歌としてまとめたが故のもので、卷十四の冒頭の五首の「東歌」も全体にかかるもので、五首は一般にいわれているように未勸国歌に準じて勸国歌群の雑歌とみれば、一首の挽歌も含めて、雑歌、相聞、挽歌の三部類に譬喻歌を加えているかたちとなっていて、万葉の基本的な三大分類の原則に反するものではない。

この未詳歌巻の一大歌群中には卷八、卷九の作者判明歌の二巻がはさまれているが、それら両巻も、卷八は卷十と等しく、四季歌を春雑歌(30) 春相聞(17) 夏雑歌 夏相聞(13) 秋雑歌(59) 秋相聞(30) 冬雑歌(19) 冬相聞(9) というように、雑歌と相聞の八部に分けているし、卷九は雑歌(102) 相聞(29) 挽歌(17) で、最も基本的な分類となっている。これらを見ると、現万葉の分類には、すくなくとも卷十四までの諸巻には、その分類の大本に、錯綜する一面にもかかわらずある一貫したものを感ずると共に、未詳歌巻における多少の分類項目の増加は、未詳歌を分類したが故のもので、その所収歌の内容の相違などに対する配慮からの細分や新設であろうと思われる。

作者判明歌を収める前六巻と、未詳歌巻中の卷八、九の

二巻は、作者をはじめその作歌事情がある程度知り得るため、年次順配列を施すことが可能だった。伊藤博氏のいわゆる古今倭歌集^(金4)としての意図や意義は、これら作者判明歌巻のうちにおいて顕著に認められることと思う。

だが、それら判明歌巻に分類の基本姿勢を得ながら、作者未詳歌巻はその分類内の歌の配列にあたっては、判明歌巻に範を得ることをしなかったしまた出来なかつた。

それは唯一作歌事情の喪失によると思われる。伊藤氏は巻七以降十二の六巻までをも古今歌巻として設定される^(金5)が、その間の未詳歌巻ならびにそれにつづく同氏のいう歌謡歌巻十三、十四の二巻は、^(注6)作歌事情の喪失により

「時」の觀念からある意味では解放され、したがって歌の内容、表現法が重視され、それが歌の分類には判明歌巻に依拠しつつもなお、新たな分類を生み、なお更には配列に一段の考慮がはらわれて、従前の判明歌巻にはみられない配列がなされたのではないかと思われるのである。

そして、その分類配列の第一のものは物による、(景物・寄托物)意識であつたと思う。それは、巻十一、十二の両巻における寄物陳思の部類を正述心緒に対して分けただけではなく、巻七以降の作者未詳巻全六巻を貫く、未詳歌巻独自個有の、各部類内に顕在しないしは潜在する詠

物、寄物の類別配列によって何うことができる。そしてそれにつぐ第二の意識は、作者や作歌事情の詳細は知られぬながら、歌中の歌句をたよりに類別し得る巻七の羈旅発思以下の類別や、巻十三、巻十四などにみられる作歌の場所による配列であつた。判明歌巻の歌の配列の基本が、主として時により人による配列であつたとすれば、未詳歌巻のそれは物により、所による、といえよう。

未詳歌巻の類別配列は、撰者の前におかれた資料の多くが作者をはじめ作歌事情を喪失していたが故に、所収歌の歌句や内容から判断して類別する以外になく、とすれば何を詠み(詠物)何に寄せて(寄物)歌われたものかが他の何事にもまして分類の基本となつたことは当然であつたであらう。これら六巻中の最初の巻七において編者の手にしえたものは詠物歌、寄物歌として扱われる時期のものやかかる扱いにふさわしい作歌内容のものが多かつたとも思われる。もとよりこれらの物による類別の観点は全く新たに巻七編録にあつて試みられたものではなく、後にも触れるように、中国の類書などの影響も全体的にあつたであらうし、すでにそれらに範を得て編まれたと思われる類聚歌林の先例もあつたことだつたと思われる。また人麻呂歌集が寄物による配列の部分^(金7)をすでに有していたとする論もなくはない。いずれにし

ろ、未詳歌群を一巻に編するにはそれに相応する配列への工夫と配慮がなされ、しかも未詳歌巻諸巻相互に相通する編纂態度が、諸巻の所収歌の異質性や内容の相違にもかかわらず基本的態度として、一貫していたとみることもができる。それは物に執し所にかかわる点である。ではそれらについていっそう具体的に論述しよう。

二、巻七の物と所による配列

未詳巻第一巻の巻七は、雑歌、譬喻歌、挽歌の三つに分類されていることは前述のとおりで、巻三の分類と同一だった。しかし巻七はその所収歌の配列にあたって小題を次のような順序に付して、物による分類配列の姿勢を明らかにしている。

雑歌 詠天(1) 詠月(18) 詠雲(3) 詠雨(2) 詠山

(7) 詠岳(1) 詠河(16) 詠露(1) 詠花(1)

詠葉(2) 詠蘿(1) 詠草(1) 詠鳥(3) 思故

郷(2) 詠井(2) 詠倭琴(1)

芳野作(5) 山背作(5) 撰津作(21) 羈旅作(90)

問答(4) (詠鳥2・詠白水郎2) 臨時(12) 就

所発思(3) 寄物陳思(1) 行路(1) 旋頭歌(24)

譬喻歌 寄衣(3) 寄玉(5) 寄木(2) 寄花(1) 寄

川(1) 寄海(3) 以上入麻呂歌集出

寄衣(5) 寄糸(1) 寄玉(11) 寄日本琴(1)

寄弓(2) 寄山(5) 寄草(17) 寄稻(1) 寄木

(6) 寄花(6) 寄鳥(1) 寄獸(1) 寄雲(1)

寄雷(1) 寄雨(2) 寄月(4) 寄赤土(1) 寄

神(2) 寄河(6) 寄埋木(1) 寄海(6) 寄浦

沙(2) 寄藻(4) 寄船(5) 旋頭歌(1)

挽歌 小題なし(13) 羈旅歌(1)

以上よってみるに、雑歌は前半「詠倭琴」までに詠物歌を収め、譬喻歌は末尾一首の旋頭歌を除きすべて寄物歌で占められる。物に類別配列の基準をおいたことは一見明瞭であって、その他も雑歌中の四首の問答など鳥と白水郎を詠むと注記されているし、一首ではあるが寄物陳思の小題を付した^(注9)ものも存する。

一方、所による類別の意識はまず雑歌の詠物歌直後に、「芳野作」「山背作」「撰津作」をおく。一括された羈旅歌も第一首目には

家離り 旅にしあれば 秋風の 寒き暮に 雁鳴き度
る (7・一一六一)

の作をおき、冒頭部六首(一一六一～一一六八)は地名の有無にかかわらずさまざま旅情の作を収めるが、続く四十余首藤原卿作の注記のあるところまでは四首の例外(一一八四・一一八六・一一二一・一一二六)を除きすべて

に地名をもつ。それ以下のものは地名を含む歌が二十首にも足りないところからみて、この四十首に所の明らかなき歌を集中させた意図がみられる。この地名に執することは、羈旅歌の当然の結果と思われるが、この態度は、羈旅作歌のみならず、最後の挽歌にも及んでいるものとわたくしはみる。

卷七挽歌十三首は左のように並ぶ。

- (1) 鏡なす わが見し君を 阿婆の野の 花橋の 珠に拾ひつ (一四〇四)
- (2) 蜻野を 人のかくれば 朝蒔きし 君が思ほえて 嗟きはやまず (一四〇五)
- (3) 秋津野に 朝居る雲の 失せゆけば 昨日も今日も 無き人念ほゆ (一四〇六)
- (4) 隠口の 泊瀬の山に 霞立ち 棚引く雲は 妹にかもあらむ (一四〇七)
- (5) 狂語か 逆言か 隠口の 泊瀬の山に 慮せりと いふ (一四〇八)
- (6) 秋山の 黄葉あはれと うらぶれて 入りにし妹は 待てど来まさず (一四〇九)
- (7) 世の中は まこと二代は 往かざりし 過ぎにし妹に 相はなく念へば (一四一〇)
- (8) 福の 何なる人か 黒髪の 白くなるまで 妹が

音を聞く (一四一一)

- (9) わが背子を 何処行かめと さき竹の 背向に宿し 今し悔しも (一四一二)
- (10) 庭つ鳥 鶉の垂り尾の 乱れ尾の 長き心も 念ほ えぬかも (一四一三)
- (11) 薦枕 相巻きし児も あらばこそ 夜の深からく も わが惜しませぬ (一四一四)
- (12) 玉梓の 妹は珠かも あしひきの 清き山辺に 蒔 けば散りぬる (一四一五)

或本歌曰

- (13) 玉梓の 妹は花かも あしひきの 此の山影に 蒔 けば失せぬる (一四一六)

これらの歌群の背景は歌のみによって判ずるよりその方途はないが、(1)(2)(9)が夫の死を、(4) (8)(12)(13)が妹の死を嘆くもので、(1)(2)(12)(13)は火葬の背景を思わせる。この一群の中では(12)とその或本の(13)は故人の骨を拾うという点で(1)と趣きを等しくする。一方は妹の骨を珠や花に、一方は夫の骨を珠に拾うという発想に類似点をもつ。また(9)や(11)はあるいは背子を或は妹を失って後の独り寝のわびしさを訴える点で共通点をもっている。しかし、それらの歌の作者の性別や心情にさほどかかわっての配列とは思われぬ。

わたくしはこれは、(1)より(5)までが地名をもつが故に先におかれ、(6)以下は地名なきが故に後にまわされたと思う。(1)は阿婆の野、(2)(3)はあきつ野、(4)(5)は泊瀬の山の地名を有する。阿婆の野は明日香付近、初瀬付近という説があり、あきつ野は吉野の秋津野ともいわれるが、もしそうだとすれば、(4)(5)のあとに(2)(3)が入れられるのが、旅の歌で、吉野、山背、摂津、その他となっていた巻七のあり方からふさわしいが、ここは、地名のある五首中から(1)「珠に拾ひつ」——(2)「朝時きし君」——(3)「朝居る雲の」——(4)「棚引く雲は」——という作歌事情というよりも歌句によって醸し出されるある種の内容上の流れを考え構成させて、(1)と(4)がかく並べられたと思われし、(4)に泊瀬の山があることによって(5)がそれにつづくのも必然だったと思われる。かようにこの挽歌部は、挽歌群中より地名あるものを五首まず選んで、その五首のうちで鑑賞上の歌の流れを意図したとみる方がよい。以下九首の無地名挽歌も、(5)に「泊瀬の山」があるにより(6)は「秋山の」の句を発句にもつものを並べ、(6)の「入りにし妹」につづけて(7)の「過ぎにし妹」に移り、(8)(9)(10)あたりはその他のものとし、最後の(12)ならびに(13)に、火葬の場を等しく思わせるものを収めて第一首(1)と呼応させているととれよう。

巻七が詠物、寄物の物にかかわってまず配列された一方では、それと同じ扱いをなし得ない内容の歌群は、他方で地名を配列にあたって考慮するなど、ものともどころにかかわることは以上のとおりである。

では次にまず第一に配列の基準にされた物について、詠物寄物を一括して、巻七の場合を考えてみよう。

三、巻七の天・地・人の分類

未詳歌巻の詠物歌、寄物歌の配列に限ってみると、従前よりかなり多くの説がなされてきて、巻七の場合もその例外ではない。後藤利雄氏はその著『人麿の歌集とその成立』の中で、諸説を整理して次のごとく(巻七の部分のみ掲出)まとめておられる。

○徳田浄氏「人麻呂集と万葉集」(『国語と国文学』17巻5号)

(一) 人麻呂集出の歌

雑歌 天部、地部、植物部。

譬喻歌 衣服部、器物部、植物部、地部。

(二) 逸名氏作の歌

雑歌 天部、地部、植物部、動物部。

譬喻歌 衣服部、器物部、植物部、天部、神祇

部、地部。

○次田真幸氏「万葉集の作者不明の歌の分類と排列」

〔お茶の水女子大学紀要第八号〕

雑歌 天、地、植、動、雑、器
 譬喩歌 衣、器、地、植、動、天、神、地

そして氏自身はそれらの検討の結果、雑歌は

天部 (詠天)、詠月
 氣象 詠雲、詠雨

地部 地 詠山、詠岳、詠河、詠露
 植物 詠花、(詠葉)、詠蘿、詠草
 動物 詠鳥

人部 思故郷
 人工物 詠井、詠倭琴

とされる。氏の論は人麻呂歌集の配列を中心に、諸未詳歌巻と併わせての総合的視点よりなされているが、氏に従えば巻七詠物歌がもっともあざやかに「天、地、人の支那式排列に基づいて」三部門に総括されているといわれる。これは寄物(譬喩歌)においても、天、地、人の順序は入れかわるが、三部門の総括という点では同様で、徳田氏の類別の(一)の衣服、器物を人部とし、植物部、地部、を地と一括すれば、人、地の二部構成となり(二)の衣服器物部を人、植物部を地とすれば地部が天の後に再出するが、人、天、地の三部の総括的部門が人、地

天、地の順に保たれていることになる。ただ、徳田氏の類別によると、人、天の間に植物が、天、地の間に神祇が混入する。また次田氏の類別によってみても、譬喩歌の部は、

人	地	天	地
衣器	地植動	天	神
			地

となつて、地部が天部を中にして二つに分かれ、更に天、地の間に神が収められている。詠物歌において、天、地、人がその順序で並べられていることと、寄物歌において、人、地、天、につづいて再び地が収められることは何を意味しているだろうか。いま、神の類はしばらく措き、なお諸未詳巻の詠物、寄物配列の様相から一応離れて、巻七についての三部門について考え、後にいづれは他巻との比較検討に進みたい。

巻七詠物歌における天、地、人の総括的類別とその順序は、土田知雄氏によれば、すくなくとも天部、地部の事物の配列は芸文類聚に近似するといわれ、その順序において玉篇(注12)をも加えてそれに酷似することも渡瀬氏によって指摘されている。なお渡瀬氏は、「天、地、人」の順序が玉篇、芸文類聚の系列による配列であるとし、「人、天、地」は爾雅、北堂書鈔系であるともいわれ、

主として卷十一、卷十二においてではあるがそれぞれ「分類の拠りどころ」の相違がもたらしたものかとも推測されておられる。卷七の場合、詠物歌と寄物歌の類別に、異った中国文献に個々別々の拠りどころを求めたものとは同一巻中だけに考えにくい。

徳田氏の類別の(一)(二)の雑歌をみるに、その(一)の人麻呂歌集出の歌も、(二)の逸名氏作の歌も、天、地、人に併せてみると、

	天		地	
(一) 雑歌	天部	地部	植物部	
(二) 雑歌	天部	地部	植物部	動物部

のように人部がなく、天と地の二部に総括される。これは人部を立てずに、一般に人部とされるものを無視したためである。詠物雑歌の人部は、

思三故郷

清き湍せに 千鳥妻喚ぶ 山の際に 霞立つらむ 甘南備の里(一一二五)

年月も 未だ経なくに 明日香川 湍瀬ゆ渡しし 石い走はもなし(一一二六)

詠井

落ち滝つ 走井水の 清くあれば おきてはわれは

去きかてぬかも(一一二七)

あしびなす 栄えし君が 穿はりし井の 石井の水は 飲めど飽かぬかも(一一二八)

詠三和琴

琴取れば 嘆き先立つ けだしくも 琴の下樋に 婦や匿ひそれる(一一二九)

のわずかの五首であって、直前の「詠鳥」三首(一一二二～一一二四)は後の二首に「千鳥」を詠み、それにつづけてこの「千鳥妻喚ぶ」甘南備の里の「思故郷」につづく。「思故郷」は「詠懐」という考え方もできるが、詠物歌のすべてが「詠」と小題されていたのに対し、この小題は「天」「地」と「人」の間に介在して、天、地と人部を引きはなす方向に力を借している。それが徳田氏によって、天地から切り棄てられる結果となったとも思われる。第二項に示した歌数は、更にこのことを裏づけよう。

天部 二四首 地部 三三首 人部 五首

この歌数によってみれば、天と地の両部門は同格同列の重みをもって相対しておかれていてに反して、人部はわずかにその五分の一あるいは七分の一の歌数しかもたず、かすかな存在として添えられているに過ぎない感がある。

後藤氏は卷七詠物を天、地、人よりなる「支那氏排列法」といい、この人部の中に、詠物歌とは思われない各地作（芳野作、山背作、摂津作）羈旅作以下問答、臨時：旋頭歌にいたる卷末歌までの一切を含めさせている。これは人部を一六六首に数えて極端に過重にするばかりでなく、各地作以下のすべては、物を詠ずるとはいいがたく、旅中作歌その他旋頭歌など内容や歌体による別個の基準によるものとしなければなるまい。とすれば、やはり、卷七の物を詠ずる歌は、何よりも所収歌の内容によって類別せられているわけで、この場合卷七雑歌は、天部と地部の二大類別の上に、人部の少数歌を添えて天、地にプラスアルファとして人を付したものと見えよう。

この詠物歌の天、地プラス人の類別から改めて寄物の譬喻歌をみると、人麻呂歌集の所出歌は「寄衣」「寄玉」を人部として扱い、以下「寄木」「寄花」「寄川」「寄海」が地部とみられるとすれば

人 八首 地 七首

となり、天部を欠く。これもここに所収されるべく意図された歌集歌に天がなかったというより求めなかったことによることは当然である。またその他歌集歌以外のものは、

人 寄衣 (5) 寄糸 (1) 寄玉 (11) 寄日本琴 (1)
 寄弓 (2)

地 (一) 寄山 (5) 寄草 (17) 寄稻 (1) 寄木 (6) 寄花
 (6) 寄鳥 (1) 寄獸 (1)

天 寄雲 (1) 寄雷 (1) 寄雨 (2) 寄月 (4)

地 (二) 寄赤土 (1)
 (2)

(神) 地 (三) 寄河 (6) 寄埋木 (1) 寄海 (6) 寄浦沙 (1)
 寄藻 (4) 寄船 (5)

となつてゐる。これも、

人 二〇首。地 (一) 三七首。天 八首。地 (一) 一首。
 (神) 二首。地 (三) 三首。

となる。地を天部の前後に配したのは、人、天に対して、地部の歌数が極端に多く、その偏りを一方ではふせぎ、他方では、地を二分して、草を中心とした植動物の歌群に山を先行させたのに対するに、水にかかわる河、埋木、海、浦沙、藻、船を対比させて、特別に取り扱って後にまわし一括したことによる。これは、詠物歌の本来のものか天と地にあり人は従属すべきものとの意識に対して、寄物歌の本来のまさにあるべきものは人部で、天と地はそれに従属すべき性質のもの、しかしながらここでは、草の多数例がその採録予定資料にあったが為に、地

を二分させ、それを中心においた地(一)と、なお他巻にも多数例をもつ水に関する地(三)の類を末尾に据えて、人、地、天、地の順を案じて、詠物雑歌とは異った性格の寄物譬喻歌の本然の姿を示さんとしたものではなかったか。(神の部の二首については後に一括して取り扱う)

この巻七の雑歌と譬喻歌の相違は天、地、人が玉篇、芸文類聚系で、人、天、地が爾雅、北堂書鈔系であるという指摘に関してはその事実の由来を知るべきであろう。玉篇、芸文類聚が何故に、天地人であり、爾雅、北堂書鈔がそれに対し何故に人天地の配列であるのか、それら中国文献の内容の必然性からんで理解されねばならないと同時に、同一巻の巻七において、一方の雑歌の詠物歌を玉篇系列とみ、他方譬喻歌を爾雅系列とみることや、ましてやそれらが「抛りどころ」を異にしたがためとみることは一見事を明解に処理するかにみえて危険をはらもう。(註16) 巻七に関する限りは蒐集された作品に忠実に、詠物歌は詠物歌の本然の姿をとらえ、寄物歌は寄物歌としての内容性を勘案し、採録の予定された作品の内容に即しての類別がなされているとみる方が妥当性をもつとみられるがどうであろうか。

四、巻十の人麻呂歌集歌の配列

前項で考えたことが、作者未詳の他巻に及ばし得ないとすれば、それは巻七の特殊な事情として意義は半減せざるを得ない。先にわたくしは実例に即せずに、作者未詳巻の六つの巻には物にかかわって類別配列する基本的態度と、所による配列の一面があることを指摘した。巻十三と巻十四が、物にかわりつつ、いっそう所の意識が顕著にみられることはすでに別稿に、別な観点より論述したところである。(註17) 巻十、十一、十二の三巻は終始物を詠み物に寄せて思いを述べる。

まずもって巻十を検してみよう。巻十は巻八に作者判明歌を譲った残りの四季詠物寄物歌群の性格を有する。未詳巻各巻の編は、各巻の歌の内容の多少の先後は認められるにしても、その編纂の時期にそう距離はない。(註18) 巻十は先に掲げたごとく、春夏秋冬の四季に分ち、それを雑歌と相聞に更に分け、都合八部で構成され、各部冒頭の人麻呂歌集を除き、すべてに詠物、寄物の物に基準をおく小題を付して、その小題のもとに各季のその類の歌を収める。次のとおりである。

春雑歌 無題(7)——(人麻呂歌集出)

詠鳥(13) 詠雪(11) 詠霞(3) 詠柳(8) 詠花

(20) 詠月(3) 詠雨(1) 詠河(1) 詠煙(1)

野遊(3) 歎旧(2) 懽逢(1) 旋頭歌(2) 譬喻

歌(1)

春相聞

無題(7)―(人麻呂歌集出)

寄鳥(2) 寄花(9) 寄霜(1) 寄霞(6) 詠雨

(4) 寄草(3) 寄松(1) 寄雲(1) 寄蘊(1)

悲別(1) 問答(11)

夏雜歌

詠鳥(27) 詠蟬(1) 詠榛(1) 詠花(10)

問答(2) 譬喻歌(1)

夏相聞

寄鳥(4) 寄草(4) 寄花(7) 寄露(1) 寄日

(1)

秋雜歌

七夕(98) 詠花(34) 詠鴈(13) 詠鹿鳴(16) 詠蟬

(1) 詠蝦(1) 詠蟋(5) 詠鳥(2) 詠露(9)

詠山(1) 詠黃葉(41) 詠水田(3) 詠河(1) 詠

月(7) 詠風(3) 詠芳(1) 詠雨(4) 詠霜(1)

秋相聞

無題(5)―(人麻呂歌集出)

寄水田(8) 寄露(8) 寄風(2) 寄雨(2) 寄蟋

(1) 寄蝦(1) 寄鴈(1) 寄鹿(2) 寄鶴(1)

寄草(1) 寄花(23) 寄山(1) 寄黃葉(3) 寄月

(3) 寄夜(3) 寄衣(1)

問答(4) 譬喻歌(1) 旋頭歌(2)

冬雜歌

無題(4)―(人麻呂歌集出)

冬相聞

無題(2)―(人麻呂歌集出)

寄露(1) 寄霜(1) 寄雪(12) 寄花(1) 寄夜

(1)

詠雪(14) 詠露(1) 詠黃葉(1) 詠月(1)

春雜歌の無題七首は春の到来を霞によって詠じたも

の、春相聞の無題七首はうぐいす(2) 花(2) 春日、

三枝、柳(各1)に寄せたもの、秋相聞の無題五首は

鳥、露、霧、尾花、木葉に寄せたもの、冬雜歌の無題四

首は雹(1) 雪(3)を詠じ同相聞二首は雪に寄せて歌

ったもの、無題はすべて人麻呂歌集出の詠で、人麻呂歌

集が尊重され特別に各季各部の冒頭を飾るといわれる。

おそらくは同歌集からそのまま抜きとられたものと思わ

れる。その抜きとられたものが、たとえば春相聞などに

みられるごとく

(1) 春山の友うぐいすの 鳴き別れ かへります間も

思ほせわれを(一八九〇)

(2) 冬隠り 春開く花を 手折り以ち 千遍の限り 恋

ひ渡るかも(一八九一)

(3) 春山の 霧に惑へる うぐひすも われに益りて

物思はめや(一八九二)

(4) 出でてみる 向ひの岡に 本繁く開きたる花の な

らずは止まじ(一八九三)

- (5) 霞立つ 春の永日を 恋ひ暮らし 夜も更け去くに
妹も逢はぬかも(一八九四)
- (6) 春去れば 先づ三枝まきくさの 幸くあらば 後にも相はむ
な恋ひそ わぎ妹(一八九四)
- (7) 春去れば しだり柳の とををにも 妹は心に 乗
りけるかも(一八九六)

とあるによつてみれば、(1)(3)がうぐいすで、(2)(4)が花、(6)(7)が三枝と柳で、(1)(3)や(2)(4)はそれぞれ同一の鳥や花を詠みながら「詠鳥」「詠花」として並べられてはいず、これらの配列は巻七の景物配列に反していて、かえつてこれらが、人麻呂集出を無題のままの形を保有した姿で採録されたものかと思わせるふしがあり、他の各季の歌集歌も必ずしも景物中心の配列とはいえず、このかたちが同歌集の原形態をとどめるとすれば人麻呂歌集に景物による配列が存したかどうかは疑わしい。

巻七などにおいて、雑歌と譬喻歌群の詠物の景物と寄物の寄托物の配列順序が、人麻呂歌集歌とその他の歌群のものとはたまたま同一であることに注目し、森本治吉氏や篠原一二氏は人麻呂歌集の配列にならつて他の部の配列がなされた(注19)とされたが、それは逆で、その点は巻七撰者が、歌集歌とその他の歌群の両者を同一に扱つて並べたものであつたであろう。この歌集は巻十の詠物、寄

物から推せば、景物や寄托物による配列がなされていなかったのがむしろ原歌集の姿ではなかつたかと思われ。故に、これら四季の各部冒頭の部の無題のものを一応除いて、巻十の詠物寄物の物の配列を考えるのが、巻十編者の物にかかわる編録類別の態度を探ることとなるう。

五、四季歌巻としての巻十の分類配列

まず春雑歌をみる。無題の人麻呂歌集歌(霞を詠む歌とも、春の到来をよるこぶ歌ともとれる)を除き、一瞥すると、末尾の旋頭歌と譬喻歌は、詠物歌とはいえず、歌体や表現の上から別にすべきであろうが、その前に野遊、歎旧、懽逢の六首がある。これは人事的な素材を歌うが、詠物歌としては歌の内容もふさわしくなく編者も「詠○○」という小題を付さなかつたもので、一応詠物歌から引き離すべきであろう。とすれば春雑歌の景物は、

鳥、霞、柳、花、月、雨、河、煙

の順にならぶ。霞、雨は天、地のいずれとすべきかは問題があるが、巻七における後藤氏の雑歌の基準に雲、雨を地象として天に属さしめているのに従えば、

鳥	霞	柳	花	月	雨	河	煙
地	天	地	天	地	人		

となり、一見して、人部を最後に収めるが、天と地は錯綜する。かりに、霞、雨の両景物を地部に属さしめても、

地(鳥、霞、柳、茶、雨)天(月)地(河)人(煙)

となつて、地を天が二分することとなる。卷七の詠物歌のごとき天、地、人の整序は期待し得ない。また、細部をみても動物(鳥)と植物(柳、花)の間に霞が入り込む。これら植物部動物部は植物を先にし動物を後にして、しかも並置されるのが卷七の雑歌、譬喩歌に共通した態度だったし、別稿に述べる卷十一、卷十二、あるいは卷十四もその例外ではない。なお動物部が何よりも先行するのも他巻にはみられないところである。では、これらは例の天地人の三部門の分類から無縁なものであるうか。物による配列をもちながら他巻から隔絶するものであるうか。三部門分類や他巻との接点があるとするれば、どの程度、どのように認められるか。もしそれらとの関連があつても稀薄だとすれば、それは何によつてもたらされたものか。

などなどの問題を解くために、次に更に春雑歌以外の

四季歌群の「詠○○」の小題を付した景物の配列を天地人の三部門にあてはめてみよう。

春相聞は

地	天	地	天	人
鳥	花	霜	霞	雨
		草	松	雲
				蘊

となり、地と天が繰り返されて人でおわる。

夏雑歌は鳥、蝉、榛、花の順で、すべて地部に属し、植物を後にする。

夏相聞は鳥、草、花、露、月で、地と天に二分され、地は動物を先にし、雑歌同様植物を後にする。

秋雑歌は景物が多く、

人	地	天
七	花	鷹
夕	鹿	鳴
	蝉	蟋
	蝦	鳥
	露	

となり、天地人がもつとも錯綜する。露を地とし、水田も地とみなしても人、地、天、地、天となり天の間に地、地の間に天が入り組んでいる。

秋相聞は

人	天	地
水田	露風雨	
		蟋蝦鴈鹿鶴草花山黄葉

天	人
月夜	衣

これも、人が最初にきて、天、地、天、と天の間に地をはさみ、最後に人がきて、人部が二分されている。

冬雑歌は雪、露、黄葉、月で、露を天とした前例に従えば、天、地、天となり小題の少いの地が天部を分つ。また冬相聞は露、霜、雪、花、夜で、夜を人部とした秋相聞に従えば、天、地、人とたまたま三部がその順序でならぶ。

いま図表化しなかった夏雑歌、夏相聞と、冬雑歌、冬相聞は歌数も少なく、したがってとりあげた景物や寄作物の項目も少いので、とりあえず図表化した部、春雑歌、相聞と秋雑歌、相聞の四つの部を中心に他を参考にして考えてその要点を整理してみると、

(一) まず最初に考えられることは、春雑歌、春相聞、秋相聞において、人部が最後に位置している。これに反するのは秋雑歌で、秋相聞にも最初に人部がみえるが、最後に衣に寄せる歌をもって人部でおわっている。

る。これは図表にしなかった部分にも共通し、夏の雑歌、相聞、冬雑歌は人部がないため問題とならないが、人部をもつ冬相聞も最後を人部で結ぶ。

(二) 次に、春雑歌、相聞は共に地、とくに鳥花を先立て、秋雑歌、相聞はそれに対して人部を先にする。夏雑歌、相聞が前者春の部と同一であり、冬雑歌、相聞は天部を先にするといった各季それぞれの特徴がみられる。

(三) 地の部は多くの部で最初におかれ、動植物が先行する。動植物は動物(鳥)を先にし、植物(花、木、草)の類を後にする。

春の雑相聞、夏の雑相聞、秋の相聞がそれで、動植物の両者を有するもので動物を先行させないのは秋雑歌に限られる。

(四) 各季のさまざまな相違や地の間に天部を入れる傾向にもかかわらず地は地で、天は天でまとまろうとするあり方も無視し得ない。たとえば秋雑歌で地の黄葉と河を引き離れたにもかかわらず花以下鳥にいたる七項目は動植物ということではならべられる。夏雑歌、相聞が動植物とならび、秋相聞で地の動植物の九項目は山、黄葉を含んで一か所にあつめられる。

(五) 天部は地部の間に入って地を分ける場合が多く、春雑歌、相聞、秋雑歌などそれであり、かなり気ままで

あるが、冬雑歌、相聞に限っては先におかれるという
あり方も示している。

(一)について、人部が最後にきた各部のものを前稿で掲
げた項目と歌数とにてらしてみると、春雑歌は「詠煙」
一首、春相聞は「詠蘊」一首、秋相聞は「寄衣」一首、
冬雑歌は「寄夜」一首でたまたますべての部が各一首の
歌を最後に収めて一首で人部を構成する。これはおそら
く偶然の一致ではなく、詠物歌、寄物歌の物にその分類
の基準をおく限り、四季歌にあつても人部をもうけるこ
とが、分類意識の中に大きくはたらいていたものと考え
られよう。人部は各季各部わずかに一首なるが故に最後
におかれたことと、四季歌という内容の歌群配列におい
てすら、天、地、人三部門の人部を無視し得なかつたこ
とは共通する。また人部が最後におかれたのは、天、
地、人の玉篇、芸文類聚系というようなものではない。
それは秋雑歌では「七夕」が人ないし天の部に類するも
のであつても第一におかれているし、秋相聞も人もしく
は地部の「水田」が第一におかれる。末尾人部がすべて
一首だったのに対し、七夕は九八首で秋雑歌中最も多く
の歌を収め、秋相聞の水田ほどの季にも多数歌をもつ
「寄花」の類を除けば露と共に八首で部類中最多の歌数
をもつ、先行も後出もその歌の数その季の特に重んぜら

れる景物、寄托物に左右されていることを知り得る。

(二)についても、(一)とかわる。春は雑歌相聞共に鳥と
花を先に収めた。動植物が並ぶ場合、巻七、巻十一、十
二、巻十四などでは植物を先に動物を後にすることはす
でに触れたが、巻十はそれに反する。春雑歌はうぐいす
ではじまる。十三首の「詠鳥」^(注20)の中で、八首はうぐいす
である。「詠花」の部は二〇首で数は多いが、桜と梅が
伯中し、山振、久木、馬酔木と分散する。このことを極
端にしたのが夏雑歌で、全歌四二首中二七首が「詠鳥」
で、鳥は一首の呼子鳥を除きすべてほととぎすで占めら
れる。ここにも鳥が第一に掲出される理由があろう。秋
雑歌が七夕の歌を先にしたのは(一)で触れたが、一方、冬
雑歌、相聞は四季歌部類中唯一天部を第一におく。これ
も春雑歌のほととぎすの扱ひと同じで、たとえば冬雑歌
一七首中一四首のほとんどが雪の歌で占められて、他は
露、黄葉、月の各一首がそれに添うにすぎない。(一)と(二)
はこのように、同一視点の上で理解できる。

(三)もすでに触れたし同様であろう。そもそもが巻十は
花鳥諷詠の一巻である。そして、花と鳥では花は種類も
多く、季も必ずしも全くの固定をみない。春は梅という
が桜もあり、冬の雪の梅もある。それらに対して、うぐ
いすは必ず春の鳥であり、ほととぎすは夏の何よりも

歌われるべきものであった。他にそれに匹敵する鳥をもたず、季と動かし難く結びつくところから四季の景物としては春においてのうぐいすと夏においてのほととぎすは花に一步先んじている。

(四)の意味するところは無視し得ない。かなり雑然として錯綜する天と地との間に、天は天で地は地で引きつけ合い結び合うのは、天、地、人の三部門の意識が撰者にあつたによる。人部を各季一首ながら添えて各部をまとめた中にも、それはみえた。万葉集は、景物、寄托物の物による限り、天が先に扱われようが地が先になるうがその順序はともかく、天、地、人の三部門の総括的基本的類別意識からこの巻十も解放されてはいない。

(五)についていえば、四季の詠物歌寄物歌において、天部が冬の雪以外は軽視されたことを物語る。霞、露、霜などをここでは月と共に天部としたが、それらは四季歌ではすべて、山や木や花や大地にかかりおかれたもので、天とみるより地の部に属させるほうが適切であったかと思う。あるいはこれらのものは歌の内容により天にも地にも扱われることがあつたかとも思う。所詮、人と共に天は、四季歌の好ましき景物や寄托物ではなかつた。天部がかなり気まぐれに地の何らかの景物などの後にあるいは前に、そしてその間に位置させられたのは、

地のそれぞれの直前直後の歌や歌群の内容と重なり合つて微妙な配列の際の慎重さを伺わせるものがあるが、ここでは触れない。天部での一般未詳歌巻での第一の景物や寄托物は月である。巻七をはじめその他未詳巻では月が相当の数をもちて天部の中心を占める。だがこの巻は四季歌なるが故に、ある特定の季の月を得ることは少なかった。巻十を通じわずか一五首、うち秋雑歌七首、他は三首どまりで、すべての月の歌は他の季の景物の援けを借りてかろうじて季の月の位置を示めるに過ぎない。

これらを総じていえば、所詮巻十は四季の花鳥の歌巻であつて、撰者の分類配列も、その作品対象、すなわち四季歌としてのまきにあるべきかたちには類別配列のあり方を模索して、撰集のため採録を予定された作品に相対し相応ずる撰者の態度によつてなされたとみられるのである。ここに巻十と前述の巻七とにおける同一態度を確認すると共に、巻七が四季というわくから離れた詠物歌、寄物歌という内容だったがためその現象面で巻十と相違をもつた側面をも理解し得ることと思うのである。

これらの蒐集された作品群の内容に即しての撰者の類別配列におけるこのような態度は、必ずしも巻七、巻十に限るものではない。

従来、巻十一、十二、十四などの寄物陳思歌の寄托物

の順序の微細にわたる相違を編者の意識の相違に帰せしめようとすると考へもあるが、それらは各巻の歌群の作歌内容の相違と併わせ再検討されるべきものと思われるし、また、未詳巻中の人麻呂歌集の配列の特殊性を強調して原人麻呂歌集を類聚的歌巻として想定しようとする試みもあるが、それについても所収歌のあり方と共に更にいっそうの慎重さが必要とせられるであろう。

巻十には所による類別の一面は巻七のごとくにはみられない。それは作者未詳の四季歌巻としての作品内容によると思われる。しかし、巻十三、十四はその一面をつぐ。巻十三、十四については別稿^(注23)によって私見はすでに述べた。巻十一、十二についてはこの稿につぐ続稿を近く用意するつもりであり、併わせてご批正を得たい。

注1 この六巻が所収歌のすべてに作者を顧慮し、題詞にはその作歌事情をできる限り記し、なおかつ、その異同やそれを欠く場合は左注によって補う態度のみえることは拙稿「万葉集巻二人麻呂歌集歌一首」(日本大学文理学部「紀要」十四輯)などにすでに述べた。

2 桜井満氏「万葉集巻十四の追補」(『万葉集東歌研究』所収)参照

3 同氏前掲論文によればこの一首は追補とみられるが、

追補の時点はその後のことではなく、追補者も前巻までの分類の基本に合致させようとしたもので、追補の真偽は私の論にさしたる影響はない。

4 伊藤博氏は巻三、四、巻七・十二の諸巻を、古と今の意識で編せられた古今歌巻とみておられる。詳しくは同氏著『万葉集の構造と成立』参照

5 前掲書参照

6 前掲書参照

7 渡瀬昌忠氏は人麻呂歌集非略体歌原本には季物による春秋冬の季節歌群が存したとされる。「季節分類の論」(『柿本人麻呂研究歌集篇上』)参照

8 後藤利雄氏は「詠倭琴」につづく各地作、羈旅作、問答、臨時、就所発思、行路、旋頭歌等すべてを詠物歌とし人部のもとするが、人部のみで一七〇余首となり、他の天、地に比して歌数が極端に多く、天の七倍以上、地の五倍以上となり均衡を失するばかりでなく、問答を除いては歌そのものも詠物歌とはいいがたい。後藤氏の論は同氏著『人麻呂歌集とその成立』参照、なお観点を多少異にするが中西進氏も「詠物歌の位置」(『万葉集の比較文学的研究』所収)で、「詠倭琴」までを詠物歌とみておられる。「詠物」という限りはこれ以下を含めて考へるべきではなからう。

9 歌の内容からみて、この一首は寄物陳思歌とはとれず、また一首のみでこの小題を付してかかる類を別に設

けたのは理解し得ない。後に補われたものと思われる。

10 この個所には歌の配列に錯乱があり、西本願寺本などにより二〇八〜二二二が現行の藤原卿作の一一九三と一一九四の間に入るべきものといわれている。それに従っての歌数を記す。以下の地名の有無ももとよりそれによる。

11 土田知雄氏「万葉集卷七の詠物歌」(『武蔵野文学』八号)

12 渡瀬昌忠氏「人麻呂の『歌集』―分類をめぐって―」(『上代文学』三十二号)

13 次田真幸氏は「思故郷」「詠井」を雑部とし、「詠倭琴」を器物の類とされるが、ともに総括すれば人に属するとみる後藤氏に従う。なお次田説は「万葉作者不明の歌の分類と排列」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』八)に詳しい。

14 「玉」は卷十一人麻呂歌集では「地」につづいておかれ(二四四五〜二四四八)ているが卷七同集では「衣」につづき次が「木」「草」なので、「衣」とともに人部におかれたものと解することができる。

15 卷十一、十二、十四共、出所を明らかにしない寄物陳思歌の一大歌群ではすべて「人」を冒頭におき、寄物歌の体裁をととのえている。「人」のうち特に「衣」の類は更に人部のうちでも特別に扱われる。「人」は寄物歌を代表し、「衣」は人部を代表象徴するものとみたい。

16 中西進氏は前掲注(8)論文ですでに卷七の詠物歌の分類が中国文献に影響するとみる諸説をあげた後に和名抄の分類を示し、それに卷七との一致を見出し、当時の意識的な一般的分類であるとされる。

17 拙稿「万葉集卷十三の配列」(『鈴木知太郎博士古稀記念論集』所収)において卷十三の配列を述べた。また拙稿「万葉集中の『人麻呂(之)』歌集出」の注記の考察(『卷十四―その注記をめぐって―』(『研究紀要』十七号・日本大学人文研)の論で卷十四の配列の問題を取り扱った。

18 伊藤氏前掲書などで歌の内容、特に地名の奈良地方や飛鳥地方の偏在などにより所収歌そのものの一部については新古の差は否定することは出来ないが、それもいわれている程原資料に新古はない。たとえ中にかなり古体をもつ一歌群があったとしても、卷七卷十四の間の万葉歌集は、おそらくその順序で、卷六の編後あまり遠くない時期に、しかも比較的短期間に編まれたものと思われる。卷七〜卷十四の編録の態度に一貫したもののあるもそのためであろう。これら編録の時期等については別に機会を得て論述したい。

19 森本治吉氏「万葉集卷第七の組織及び編纂について」(『万葉学論纂』)参照、これをうけて篠原一二氏も「卷七論」(『万葉集講座第六卷編纂研究篇』)において、ほぼ同趣旨の論を展開されておられる。

20

「詠鳥」は紀州本などかなり多くの本で二十四首数えられるが、後半は歌の内容から「詠雪」とすべきであり、このような本もあるので、一八三二―一八四二の十首を「詠雪」とした。

21

次田真幸氏前掲論文に景物、寄托物の各巻の相違について、それを直接編者の相違に結びつけようとする諸説についての紹介論述が詳しくみえる。また後藤利雄氏は「巻七の雑歌が天地人の順に排列されるのに、譬喻歌では人間関係歌が最初におかれている」ことを述べ、「分類意識の本質的な相違はやはり個性の相違につながる」

とし、「編者論の大きな手がかりになる」(同氏前掲書六

一頁)とされておられる。しかし、巻七の詠物歌において天部を先にし、譬喻歌において人部を先にすることが果して「本質的」な個性の相違といえるかどうかは疑問というより上述してきた私の論からすればむしろ否定的といわざるを得ない。

22

巻十一の人麻呂歌集略体寄物歌群が神を最初におくことから、原歌集の独自性を認めようとする説を渡瀬昌忠氏が提案されている。(注12論文)

23

拙稿注16論文参照